

日本語動詞の自他^{こなたかなた}—『詞通路』の再考^{ことばのかよひぢ}

川島 嘉美 (石川工業高等専門学校)

0. はじめに

日本語動詞の自他分類については、動詞に伴う格助詞、受身表現成立の可否、再帰性、アスペクトなど各種の観点から多くの議論が積み重ねられてきた (cf. 島田 1979, 須賀・早津(編) 1995)。本発表では、動詞活用型との関連で日本語の「自他」を先駆的に扱った本居春庭の『詞通路』(1828年)の分類を元に、日本語の自他概念について、「中動態」を出発点とした世界観から再考する。同時に、これまでヲ格の扱いに重点が置かれてきた<ガ・ヲ>構文のガ格に焦点を当て、ガ格名詞がモノから行為へと帰属先を変化させることによって生じた「自他」の移り変わりを認知的に考察する。

1. 『詞通路』の六段における「こなたかなた」

春庭は、先に完成した『詞八衢 (ことばのやちまた)』をふまえた活用型によって、動詞を「詞の自他 (こなたかなた)」の観点から下表の六段に整理する。右欄には対応する活用型を示す。尚、春庭が60種の動詞の具体例を示す一覧表では、ひとつの動詞に対して六段全てが埋まるとは限らず、動詞によっては複数の空欄も生じる。

第一段	おのづから然る／みづから然する	四種の活の混在
第二段	物を然する	
第三段	他に然する	多くはサ行下二段活
第四段	他に然さする	サ行下二段活のみ
第五段	おのづから然せらるる	ラ行下二段活のみ
第六段	他に然せらるる	

この整理について、島田 (1979:501) は「第一、二段は、あくまでも、動詞の主語の範囲の作用を意味し、第三、四段は、他者に対する働き掛けで、第五、六段は、「自発」を含め、他者からの働き掛けである」としている。さらに『詞通路』影印下巻 (1977) の巻末解説では、第三段と第四段の違いについて、前者で「然する」のはあくまでも動詞の主語であり、後者では動詞の主語とは異なる他者が第一段や第二段の内容を実現するという区別を示している。

春庭が「自他のわかち」として例示する対応関係では、第一段または第二段を出発点として各段との「自他」の対が成立する。「詞の自他の事」の冒頭部分には、「こなたのことをいふには こなたにつかふへきことはをもちひ かなたの事をかたるには かなたに用ふへき詞をつかはされは 其事くはしくわかれす 自他混雑して詞ととのはず」とあり、上述の内容と照らし合わせ、春庭の「自他」観が下記のようなものであったことが推察される。

- (1) 「自 (こなた)」は「動詞の主語の範囲」あるいは「動詞の過程の内側」、
「他 (かなた)」とはその範囲や過程の外を表す。

「きこゆる」を第一とした具体例では、「音や声」を主語とする第一段から同心円を描くように、「こなた」から「かなた」へ主語が移り変わり、連続的に層を重ねていく世界観が見てとれる。自他の対立は二元的ではなく、複層をなすものであることがわかる。

2. 中動態から見る「こなたかなた」

日本語動詞に中動態的な概念を認めようとする考えは、細江 (1928) や寺村 (1982) などに見られる。

細江 (1928) は印欧古語における態の変遷と日本語動詞の変遷を比較し、両者が中動態を共有していたこと、中動態が他の形態へ分岐する様が共通していたことを指摘している。日本語に関しては、「見ゆ」「聞こゆ」など「ゆ」を語尾とする「中相」が上代において「能相」と併立関係にあり、ある動作や状態が主語の内部に発動存在するか、その動作の影響が主語に反照するか、主語の状態がそのものの内部にあって移動するかを表したと指摘する。それら「中相」の多くは「自動詞」および「所相」(受動態)の基礎をなし、移動性に属するものからは自己以外の勢を表す「自然勢」が出来、次いで能力を表すもの、さらには一種の敬語に転成したとする。この変遷は、上述した「こなた」を出発点とした自他観と相通じる。

國分 (2017) は哲学的な視点から言語における態にアプローチし、Benveniste (1966) の主張を背景に、「意志」や「責任」といった概念は《能動》と《受動》の対立に伴って生じたことを論じる。(2)に示されるような Benveniste (同) による他動詞性の特徴づけを表した國分 (同: 88) の言葉を借りれば、「能動と受動の対立においては、するかされるかが問題になるのだった。それに対し、能動と中動の対立においては、主語が過程の外にあるか内にあるかが問題になる」。

- (2) 他動詞性 *transitivité* は、中動から能動へのこの転換の必然的所産にほかならない。かようにして中動態を出発点として、他動詞、使役動詞、あるいは作為動詞と呼ばれる能動態の動詞が構成されるのであるが、これらの特徴づけているのは、どの場合も、主辞が過程の外に置かれて、それからは行為者としてこれを支配し、過程はその座を主辞に置くのではなく、その目標としての目的辞を取らねばならない、ということである。

次項では、日本語の<ガ・ヲ>構文において「主辞が過程の外に置かれる」ようになっていく分岐点にガ格の変化が関わり、他動性を獲得していった背景を示す。

3. ガ格の変化と「こなたかなた」

助詞「ガ」は、かつては〔体言1 + ガ + 体言2〕の形で、話し手や近親者などと別の体言との間の所有・所属を関連づけ、ターゲット (=体言2) が参照点 (=体言1) の支配領域内にある「参照点関係」(Langacker 1991 他) を表していたが、次第に動作の帰属を示す主格を示す役割を担うようになった。現存する日本最古の歌集『万葉集』では、ガ格は属格と主格が混在するが、「〔体言1 + ガ + 体言2〕 + ヲ + 用言」という形式を出発点とする<ガ・ヲ>構文を含む表現を見ていくと、ガ格の属格から主格への変化が見てとれる。

(3)

- a. 青駒(あをごま)の足搔(あがき)を早み雲居(くもゐ)にそ妹(あ)があたりを／妹之當乎(あ)過ぎて来(き)にける (No.136)
- b. 石見(いはみ)のや高角山(たかつのやま)の木(こ)の際(ま)よりわが振る袖(わ)を／我振袖乎(わ)妹見(あ)つらむか (No.132)
- c. 山主(やまもり)はけだしありとも吾妹子(わぎもこ)が結(ゆ)ひけむ標(しめ)を／吾妹子之將結標乎(わ)人解(と)かめやも (No.402)
- d. み吉野の玉松が枝は愛(は)しきかも君(きみ)が御言(みこと)を／君之御言乎(きみ)持ちて通はく (No.113)
- e. 家に来てわが屋(わ)を／吾屋乎(わ)見れば玉床(たまどこ)の外(よそ)に向きけり妹が木枕(こまくら) (No.216)
- f. わが背子(せこ)を／吾勢祐乎(わ)大和へ遣(や)るとさ夜深けて暁(あかとき)露(つゆ)にわが立ち濡れし (No.105)
- g. 少女(をとめ)らが放(はなり)の髪(かみ)を／未通女等之放髪乎(わ)木綿(ゆふ)の山雲(やまぐも)なたなびき家(いへ)のあたり見む (No.1244)
- h. 朝戸出(あさとで)の君(きみ)が足結(あゆひ)を／朝戸出公足結乎(あさとで)濡らす露原(つゆはら)はやく起き出でつつわれも裳裾(もすそ)濡らさな (No. 2357)

(3a)の主格は明示されていないが作者であり、「妹があたり」は「妻の家のあたり」を意味する。(3b)(3c)は、動詞の主格(「妹」や「人」)が明示されているため、「が」が連体助詞であることが明らかである。いずれも、「ガ」については「わが-袖 (=わたしの袖)」と「吾妹子が-標 (=あなたのおしるし)」の間にそれぞれ「振る」と「結ひけむ」が挿入されており、こうした用法もガ格の主格化の一因となっている。(3d)は、「松が枝」を使者に見立てた表現であり、「松が枝」が「あなたのおことば」を持って通う意味である。作者が自分の思いをこめる歌であるという性質上、歌に描かれる動作や行為の主が作者自身であることも多く、その場合は(3e)(3f)のように明示されない主格と属格が承ける人物が一致する。(3g)の「少女ら」は作者とは別人物であるが、おさげ髪を結んでいるのは少女たちであり、「ゆふ」の動作主体とおさげ髪の持ち主が一致する。

(3h) は「朝戸を開けて帰るあなたの足結を濡らす露原よ。早く起きて出て行っては、私も裳裾を濡らそうよ」の意味である。つまり、「濡らす」主体は露原であり、あくまでも「君が-足結 (=あなたの足結)」である。しかし、後半に「われも裳裾濡らさな」とあり、この「濡らす」の主体が「われ」であることから、「君」との連関性もうかがえる。こうした<ガ・ヲ>構文が、属格であるはずのガ格を主格に解釈させる引き金となったことは否めない。また、「濡らす」は対応する自動詞「濡る」があるが、「振る」などは同じ四段活用で自動詞と他動詞があり、No.20 の額田王の歌「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖／君之袖振る」などは、動詞の用法ごとの意味から考えれば「ガ」は主格を表すとするのが適切であろうが、形式上の見分けはつきにくい。

以上のように、<〔体言1+ガ+体言2〕+ヲ>構文において、当初、体言1は体言2との所有・所属関係を示していたが、体言1が同時に動詞の主格を兼ねるようになり、次第に主格としての読みが強まるという変化が起こったことが推察される。

4. まとめ

日本語における動詞は、「詞通路」の世界観では、その活用により中動態的な概念を軸として複層的・段階的に「こなた」と「かなた」のことを言い分けており、主格は明示されないことが多かった。それが、ガ格の変化によって、本来所有・所属関係にあったふたつの体言が分離し、主格となったガ格は過程の外に置かれるようになった。ふたつの体言は個別のかつ二元論的となり、両者の間に対立が生じて<ガ・ヲ>構文の他動性を高める要因となった。以上のように、本研究では、従来はヲ格の扱いを焦点にして議論が進められていた日本語動詞の他動性について、中動態的世界観を出発点としたガ格の変化に注目することにより、その移り変わりに認知的考察を加えた。

注記：上記の万葉集作品は、中西進『万葉集 全訳注原文付』（講談社文庫）全4巻の表記および解釈に基づいている。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 18K00817 の助成を受けたものです。

<主な参考文献>

- 國分功一郎. 2017. 『中動態の世界－意志と責任の考古学』 医学書院.
島田昌彦. 1979. 『国語における自動詞と他動詞』 明治書院.
須賀一好・早津恵美子(編). 1995. 『動詞の自他』 ひつじ書房.
寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.
細江逸記. 1928. 「我が国語の動詞の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」. 市河三喜(編)『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀会.
本居春庭. 1828. 『詞の通路』(島田昌彦解説『勉誠社文庫 25・26』1977 勉誠社, 所収)
- Benveniste, Émile. 1966. *Problèmes de linguistique générale*. Gallimard.
(É.バンヴェニスト(著)／岸本通夫(監訳).1983.『一般言語学の諸問題』みすず書房.)
- Langacker, R.W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. (Vol II).
Descriptive Application. Stanford Univ. Press.